The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	行為の授受を表す表現の習得に関する研究 ： 中国語を母語とする日本語学習者を対象に
Author(s)	孫, 成志
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/34546
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　孫　成志　）	
論文題名	行為の授受を表す表現の習得に関する研究 －中国語を母語とする日本語学習者を対象に－

論文内容の要旨

1. 研究の背景と目的

本研究は、JFL環境における中国人上級学習者を対象とし、日本語の行為の授受を表す補助動詞の使用実態と言語運用に関わる要因を、質問紙調査とインタビュー調査を通して、明らかにしようとした実証研究である。

日本語の授受表現を既に学んだ中上級学習者でも、母語話者との接触場面において、助詞の誤用や授受補助動詞間の混用などによる文法上の誤りのほか、（1）のように文法的には正しいが、授受表現を使用すべきところで使っていない「脱落」や、使用すべきでないところで使ってしまう「過剰使用」などといった語用論的な誤りが目立つ。

（1）a. ？その友達のお母さんが、私達を自分の息子のようにかわいがった。
　　b. ？先生は韓国語がわからなければ、私が訳してあげます。（堀口1983: 98-100）

しかし、初級段階で日本語の授受表現を学習済みの学習者が、どんな場面において上述した語用論的な誤りを犯すのか、またなぜこのような誤りを犯すのか、その状況については、まだ明らかにされていない。

そこで、本研究では、行為の授受を表す表現に関する、より効果的な指導方法を探るため、JFL環境における中国人学習者による実際の場面における授受表現の使用実態と運用能力を明らかにした上で、日本語の授受表現の習得と運用に関わる要因を、日本語教育の視点から検討し明らかにすることを目的とする。

2. 研究の内容と方法

本研究では、日本語の授受補助動詞の習得状況を、誰かのための「恩恵・利益」となる行為であることを表す基本的な意味機能（以下、基本的な意味機能）と、行為の授受を構成する要素が抽象化することによって派生してきた意味機能（以下、派生的な意味機能）に分けて検討することにした。

前者の「恩恵・利益」の基本的な意味機能に関しては、行為の授受を表す発話の場面を行為の与え手が会話の聞き手であるか、「話題の人物（第三者）」であるかによって、（2）のように「対話」と「叙述」の場面に分けて、中国人学習者80名と日本語母語話者50名を対象に、談話完成テスト（Discourse Completion Test）による「産出レベル」の調査を行った（第3章）。

（2）a. 「対話」の場面
　　留学生：先生、すみませんが、履修届にサインしてもらえますか。
　　／履修届にサインしてくださいませんか。
　　先　生：いいですよ。どこに？
　　b. 「叙述」の場面
　　友　達：昨日大雨だったけど、どうやって帰ったの？
　　留学生：帰りに田中さんに会ってさ。彼に駅まで送ってもらったんだ。
　　／彼が駅まで送ってくれたんだ。

また、後者の派生的な意味機能に関しては、（3a）の被害や不利益を表す「～てもらっては困る」という表現や、（3b）の話し手の思い入れを表す「～てあげる」表現が挙げられる。このような授受構文の「言語的」また「文脈的」意味機能が、どのように理解されているのかを解明するため、テレビドラマのシナリオ分析から得た会話例を活用し、

中国人学習者30名を対象に半構造化インタビュー（Semi-structured interview）による「理解レベル」の調査を行った（第4章）。

（3）a．勝手にやり方を変えてもらっては困るよ。社内には慣例ってものがある。慣例！
b．じゃがいもをこうしてしっかり煮込んであげると、おいしくなりますよ。

そして、考察の部分では、中国人学習者による日本語の授受補助動詞の「理解」と「産出」に関わる要因を探るため、まず、『日中対訳コーパス』（北京日本学研究センター 2003）から抽出した310例の授受動詞構文とその対訳文を用いて、日本語の授受補助動詞とそれに対応する中国語の表現との関係を検討した（第5章）。その後、中国国内で主に使用されている4種類（16冊）の日本語の教科書に関する分析と、6名の中国人日本語担当教員を対象とする授受補助動詞の指導方略に関するインタビュー調査を通して、補足的にその考察を行った（第6章）。

3．調査結果と考察

本研究を通して明らかになったことを上述した2つの意味機能の順にまとめる。

まず、「恩恵・利益」を表す基本的な意味機能を持つ日本語の授受補助動詞に関する「産出レベル」の調査では、以下の3点が明らかになった。

1）行為の授受に「話題の人物（第三者）」が関与するかどうかが、中国人学習者による日本語の授受補助動詞の使用と選択に深く関わっていることである。

「～テアゲル」系の授受表現に関しては、「対話（申し出）」と「叙述」のどちらの場面においても、今回対象とした中国人学習者は、行為の受け手が「上位」である場合、「～テアゲル」系の授受表現は殆ど使用せず、母語話者とよく似た使用実態であった。しかし、行為の受け手が「同等」と「下位」の場合に限って、親・疎を問わず、「～テアゲル」系の使用率が母語話者をはるかに上回っており、押し付けがましい印象を与えてしまうといった語用論的な誤りを犯す可能性が示されている。

また、「～テクレル」と「～テモラウ」系の授受表現に関しては、「対話（依頼）」の場面において、全体的に母語話者は「～テモラウ」系の授受補助動詞の使用を好み、中国人学習者はやや「～テクレル」系を多用する傾向が見られた。また、① 行為の与え手に与える依頼行為の負担度（高・低）、② 行為の与え手との心理的距離（親・疎）、③ 行為の与え手との上下関係（上位・同等・下位）との3つの要素のうち、今回対象とした中国人学習者は③ 行為者間の上下関係に最も配慮しており、後述のように、行為の与え手と受け手との社会的関係、特に上下関係によって各授受補助動詞を使い分けていることがうかがえた。そして、受益表現の「脱落」による表現上の問題は、「話題の人物」から受けた恩恵的な行為を聞き手に伝える「叙述」の場面でより目立つことがデータから明らかになった。

2）中国人学習者は、3系列7形式の授受補助動詞の各言語形式を使い分けて、行為の与え手と受け手との社会的関係、特に上下関係を言語化しようとする傾向がある。

日本語母語話者は、呼びかけや、理由説明、相手への配慮と迷惑に対するお詫びを有する発話などを組み合わせ、行為者間との対人関係を調節している。しかし、中国人学習者において、行為者間の「親疎関係」による授受表現の使用実態は、顕著な差が見られなかったが、「上下関係」の要因からみれば、特に待遇性の高い場面では、話の場にはいない目上の人に対しても「～ていただく」や「～てくださる」などの丁寧度の高い表現を多用している。また、親しい同級生や後輩に対しては、命令や指示に近い間接的な依頼表現「～てくれ」と「～てください」の使用が多かった。日本語学習者の場合は、「ウチ・ソト」という立場より、身分の「上下」を大切にする母文化からの影響が強いと考えられる。

3）今回の中国人学習者の習得順序を見ると、「～てあげる」→「～てくれる」→「～てもらう」であることが示された。

調査協力者の学習環境や母語の相違にかかわらず、3系列の日本語の授受補助動詞のうち、「～てあげる」が最も早く習得されるということが、これまでの先行研究では一致している。行為の与え手と受け手との人間関係や「話題の人物」の関与、場面などの要素によって、学習者による授受補助動詞の産出状況が異なるところがあるが、本研究では、「対話」と「叙述」のどちらの場面においても、「～てくれる」構文が「～てもらう」より多く生成されていることと、「～てもらう」の誤用がやや多く見られたことから、全体としては中国人学習者の受益表現「～てくれる」の習得が「～てもらう」に先行して進むと考えられる。

そして、派生的な意味機能については、本研究では、映画やテレビドラマのシナリオ分析を通して、上述した（3）のほか、下記にように、（4a）の話し手の決意や強い意志を表す「～てやる」や、（4b）の聞き手に対する気遣いや丁寧な気持ちを表す「～てもらう」、（4c）の聞き手の負担を軽減するため用いられる「～てくれる」といった「恩恵・利益」以外の拡張用法が合わせて10種類確認された。

（4）a．狙った的は外さない。待ってろ早稲田！絶対合格してやるから！
b．この道を真っ直ぐ行ってもらって、角を左に曲がってください。
c．もし君に、不安や迷いがあるなら、今からでも断ってくれて構わないから。

この10種類の派生的な意味機能を持つ授受構文の使用場面を用いて、インプット理解に関する調査を行った結果、授受補助動詞の選択者数からいうと、「～テアゲル」系→「～テクレル」系→「～テモラウ」系の順になっており、全体的に「～テアゲル」系の授受補助動詞はより理解されやすく、「～テモラウ」系はより理解されにくい結果となった。そして、上述した派生的な意味機能の用法は、大きく＜理解／産出可能な用法＞、＜理解可能な用法＞と＜理解困難な用法＞との3つに分けることができる。中上級学習を対象とする日本語教育において、（4a, b）のような「理解可能なインプット」を少しずつ導入することが必要かつ可能であると主張したい。

4．日本語教育への提言と今後の課題

上述した調査結果とその考察に基づき、これからの中国人学習者を対象とする日本語の授受表現の指導に対して、次のような提言を行いたい。

まず、日本語の授受補助動詞の提出順序については、これまでに① 3系列7形式の授受補助動詞をすべて1回の授業で導入する場合と、②「～てあげる」「～てくれる」「～てもらう」とその待遇表現を区別しそれぞれ1回の授業でまとめて教える場合との2つのパターンがあったが、どちらも授受補助動詞を初級の後半あたりで1つのかたまりとして「体系的に」導入している。しかし、今回の調査結果を考慮した結果、従来一括して導入されてきた日本語の授受補助動詞を解体し、一番習得されやすい行為の与え手を主語とする「～てあげる」構文を先に教え、その後、「～てくれる」構文から、「～てもらう」構文へと導入することを提案したい。また「～てくださる」や「～ていただく」といった難易度の高い待遇表現は、初級の終わりか中級に回すとよいと考える。

また、日本語の授受補助動詞の学習は、初級後半から始められるが、この時期であれば文の文法的意味や言語形式の習得に最大の関心を払いつつも、発話の意味内容や表現意図などのコミュニケーション上の働きにも焦点を当てた指導も可能となる。具体的には「～テアゲル」系を指導するにあたり、今までの消極的な回避指導ではなく、学習者に母語話者による「～テアゲル」の使用場面を提示し、対人意識の理解を促した上、学習者自身が主体的に使えるように指導することの必要性と重要性を強調したい。また、「～テクレル」と「～テモラウ」系に関して、本調査では、受益表現の欠如による運用上の問題は、中国語の「事実志向」の現れであり、日中言語話者の物事に対する概念の相違に起因するものであると考える。日本語の話し手の立場から物事を捉える「話者中心性」と、第三者の行為に対しても話し手の価値判断を付与する主観性の強い「立場志向性」の二つの特徴を、中国語の「事実志向性」と比較しながら行うなど、指導の仕方を工夫する必要があると考える。

最後に、学習者のコミュニケーション能力を養い、授受表現に関する指導上の留意点をさらに深く記述するには、本研究を土台にして、単文レベルの授受表現だけでなく、複文やテクストレベルでの授受表現を考察していく必要があると考えているが、それについては今後の課題とする。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　孫　成　志　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	真嶋　潤子
	副 査	教授	古川　裕
	副 査	教授	鈴木　睦
	副 査	教授	堀川　智也
	副 査	准教授	清水　政明

論文審査の結果の要旨

＜総評＞

本論文は、現代日本語の文法項目の中でも、日本語学習者には習得困難であるという指摘の多い授受表現、その中でも物の授受でなく行為の授受を表す授受補助動詞を研究対象とし、その習得に関して先行研究を一歩進めることのできた実証的研究である。現代日本語の「理論文法」ではなく、教育現場での応用を主たる目的とした日本語「教育文法」の実証的研究として、多数の先行研究を批判的に咀嚼し、それらを踏まえた上で、非常に手堅く仮説構築→調査→分析・考察→結論→教育現場への提言というプロセスを経て論じられているが、論旨の展開に強引さはなく、本論文の主張や結論も説得力を備えている。

授受補助動詞の基本的意味機能についての学習者と母語話者の運用状況を談話完成テスト（DCT）を用いて調査した結果は、設定場面を対話/叙述に分け、話し手/聞き手の関係を上下・親疎で分けた詳細な調査となっており、先行研究を一部支持した上でさらに考察を進めており評価できるが、特にユニークなのは従来の日本語教育分野で論じられることの少なかった授受形式の派生的用法をめぐる考察（第４章）で、これまでの応用研究分野の空白を埋めるものとして、興味深い論考であり分野への貢献が認められる。また、候補者の母語であり、候補者の主たる教育対象となる学習者の母語でもある中国語との対照研究（第５章）においても、母語話者にありがちな恣意的な記述を慎重に避けて、客観的な分析と考察を行っている点に特に好感が持てる。

総じて、内容的に有意義であり分野に貢献し、丁寧にわかりやすく論じられており、博士後期課程の所定期限内で着実に蓄積してきた研究成果が結実した優れた論文であると評価できる。日本語もこなれており、正確である点も付け加えたい。

＜論文の内容＞

本論文は、中国で学ぶ中国語母語の日本語学習者を対象に、日本語の行為の授受を表す授受補助動詞の理解と運用に関する要因を調査し、考察した上で、教育現場への応用を提言することを目指した実証的研究である。行為の授受を表す授受補助動詞「～テアゲル／モラウ／クレル／サシアゲル／イタダク／クダサル／ヤル」の３系列７形式について、日本語能力試験N１（または旧試験1級）合格者である上級学習者でも、助詞や授受補助動詞の選択間違いなどの文法上の誤りの他、語用論上の「脱落」（不使用）や「過剰使用」の誤りが多い。そのような授受表現の学習者の習得と運用に関する要因を明らかにすることを目指した研究である。

この目的のために、本論文では、まず日本語の授受補助動詞を、次の２つに分けることとした。

(a)「恩恵・利益」を表す基本的な意味機能（例：「手伝ってくれてありがとう」）

(b) 行為の授受を構成する要素が抽象化することによる派生的な意味機能（例：（料理番組）「よく煮込んであげるとおいしくなりますよ」）

さらに (a) の発話場面を、行為の与え手が会話の聞き手である「対話」場面と、行為の与え手が話題の人物である「（第三者から受けた恩恵的行為を聞き手に伝える）叙述」場面の２つにわけて調査した。(b) については、シナリオ分析から10種類の派生的意味機能を持つ授受補助動詞を抽出した上で、中国人上級学習者の理解を探った。

その後、学習者の母語の日本語への影響を考察するために、日中対照分析をコーパスを使って行い、さらに学習者

が受けた日本語教育を探るために、教材分析と教員へのインタビューを行っている。

本研究で実施された調査をまとめると、以下の６種類である。

(1)中国人学習者80名と日本語母語話者50名への質問紙調査（談話完成テスト）

(2)映画やテレビドラマのシナリオ分析

(3)(2)を通して得た10種類の「派生的意味機能を持つ授受補助動詞」の理解についての中国人上級学習者30名への半構造化インタビュー調査

(4)『日中対訳コーパス』（北京日本学研究センター　2003）を用いた日中対照研究

(5)中国国内でよく使用されている４種類（16冊）の日本語教科書の教材分析

(6)中国人日本語担当教員６名への授受補助動詞の指導方略に関するインタビュー

本論文では、授受補助動詞の習得を調べるために、このように多岐にわたった研究デザインを採用し、実施している。すなわち、対象とする言語そのものの調査（(2)と(4)）、学習者の習得・運用状況の調査（1）、母語話者の判断の調査（1）、学習者の（派生的用法の）理解についての調査（3）、教材の調査（5）と教員の考え方の調査（6）と捉えることができる。これらは言語の分析から始まって、その使用者である母語話者と学習者の理解と判断の調査、そして教育方法についての検討、と重層的かつ有機的に調査が行われており、目配りの行き届いた研究デザインになっている。

論文では、序論（第１章）、先行研究（第２章）に続けて、本論文の主眼である授受補助動詞の２つの研究課題を３、４章で分析し論じている。すなわち「恩恵・利益」の基本的な意味機能を表す授受補助動詞の使用実態と運用能力（第３章）と、派生的な意味機能を表す授受補助動詞の理解状況（第４章）である。そこで得た調査結果をさらに考察するために、学習者の母語・母文化の影響（第５章）と、日本語教育における授受補助動詞の取り扱い（第６章）に分けて論じている。終章である第７章では、結論と教育への提言に加えて、本研究の限界と今後の課題がまとめられている。

このように本論文では、中国語を母語とする学習者への授受補助動詞の習得をめぐって、順序だててかつ緻密に多面的探求が行われた。それぞれの方法論についても、慎重に吟味され妥当性が示されていることは評価できる。これらの調査の結果、以下のような事柄が明らかになっている。

- 「テアゲル」系の授受表現では、行為の受け手が「上位」である場合、CJもJNと同様に殆ど使用しない傾向が見られた。しかし行為の受け手が「同等」「下位」の場合、親疎を問わず「テアゲル」系の使用率がJNをはるかに上回っていることから、（「恩着せがましい」印象を与えてしまうという）語用論的な誤りを犯す可能性が示されたこと。
- 「テクレル」「テモラウ」系の表現については、今回のCJは、上下関係に最も配慮して使い分けていることがわかったこと。また授受表現を使うべきところで使用していない「脱落」の問題は、「対話」場面よりも「叙述」の場面でよく起こることが示されたこと。
- 今回のCJの習得順序は「テアゲル」→「テクレル」→「テモラウ」であることが示された。「テアゲル」の習得が早いことは先行研究を支持するものである。
- 派生的な意味機能を持つ授受補助動詞は、場面依存性が高く使用場面が限られていることに加え、ほとんどの場合は、前後の文脈や言語外情報といった語用論的要因で恩恵以外の派生的意味機能を表出している。今回のCJは前後の文脈や母語を手がかりにして、話し手の表現意図を理解できており、言語的、語用論的な意味を読み取ることが可能であることが示された。
- 日中対訳コーパスからは、「テクレル」が訳出されないことが多く、中国語母語話者には最も意識しにくい表現であることが示唆された。
- 教材分析の結果からは、３系列７形式の授受補助動詞を全て1度に導入する場合と、３系列を別にして導入する場合がある。「テアゲル」の恩着せがましさを回避するために消極的な回避指導を勧めるものが多く見られた。
- 今回分析した教材分析の結果からは、日中両言語の授受表現の相違点の説明が不十分であったことが指摘された。

本研究で明らかにされた点は、日本語教育学の分野で今後の教育実践に生かされ得ることが多く、また検証可能性の高い健全な調査がなされているので、今後のさらなる調査研究への道筋をも示したものと評価できる。

以上、論文審査の結果を踏まえ、当該博士論文が本学において博士（言語文化学）の学位を授与するに相応しい水準に達したものと判断し、五名の審査委員が全員一致で合格と結論づけた。